UNBOUND 2026 RECAP

# 次の5年は、賢い人には報いない

The Next 5 Years Will Not Reward the Smartest People

Jay Schwedelson（創業者 兼 CEO, GURU Media Hub）

2026年9月17日（木）13:45-14:15 EDT ／ Main Stage

株式会社100




# Main Stageでの30分のソロ登壇

9月17日。会場で撮影

# 成績証明書から始まった30分

冒頭で、自分の1996年の大学の成績証明書を投影するところから始めました。統計学は3回目でようやく単位を取れた（C+）と明かし、学歴や成績はもう差にならない、という本題につなげています。

# 前提: 賢さで差がつかなくなった

- 同じ情報に、誰でも同じようにアクセスできる。学歴も資格も、差を生む材料ではなくなった
- では何で決まるのか。登壇者の答えは**自分に期限を課すこと、止めないこと**だった
- 仕事をこなしているだけでは学ばない。目の前に置かれたものを処理しているうちに10年が過ぎる
- 足りないのはモチベーションではない。**自分に対する締め切り**がないこと

# 誰もあなたに期待していなければ、
# 自分にも期待しなくなる。

If nobody is expecting anything from you, it becomes really easy to expect nothing from yourself.

Jay Schwedelson ／ UNBOUND 2026

# 毎週やることを、1つだけ決める

| 週あたりの時間 | やること |
|---|---|
| 5分 | 業界記事を1本、チームのチャットに共有する。「これがうちにどう効くか」を一言添える |
| 10分 | 競合の動きを1つ、定例に持ち込む。試してみたいことを1つ挙げる |
| 20分 | 上司に「今週学んだ3つ」を送る。チームが取るべき手を1つ推す |
| 30分 | 毎週金曜、部門全体に業界の動き3つをメールで流す許可をもらう |
| 45分 | 新しいツール・プロンプト・手法を1つ試す。試した／結果／判断、の3点で共有する |
| 60分 | 部門定例の10分を自分で持つ。変化3つと、自社が知っておくべきことを話す |
| それ以上 | 毎週なにかを公開する。ニュースレター、ポッドキャスト、動画 |

本人はポッドキャストを続けている。「毎週やると決めたから、調べざるを得ない」という理由づけでした。

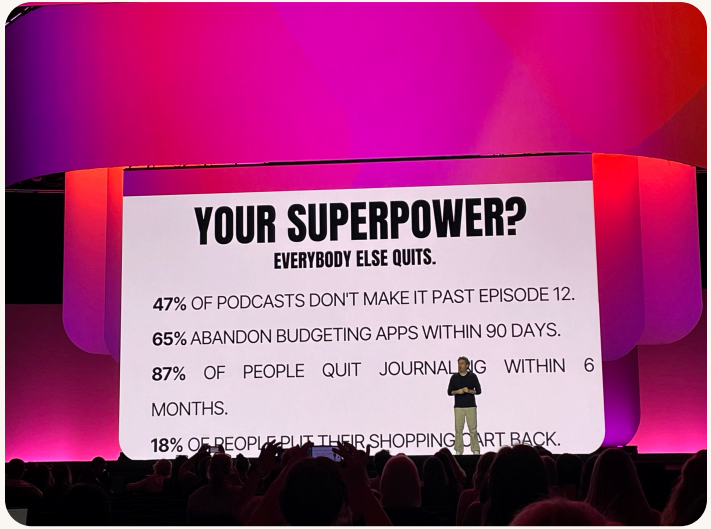



# 「WHAT'S YOUR WEEKLY THING?」

前ページの表のもとになったスライド。会場で撮影

# 強みは、他の人がやめることにある

- ポッドキャストの**47%**は第12回までに終わる
- 家計簿アプリの**65%**は90日以内に使われなくなる
- 日記をつけ始めた人の**87%**は6か月以内にやめる
- スーパーのカートを元の場所に戻す人は**18%**




スライドに表示されていた数値を書き写したもので、出典は示されませんでした。

# 止めないだけで、
# 世界の95%に勝てる。

You will beat out 95% of the people on this planet by not stopping.

Jay Schwedelson ／ UNBOUND 2026

# 勇気は10秒あればいい

社交の場が苦手だという話に対して、「恐れをなくす必要はない。10秒だけ押し切れればいい」と整理されました。自己紹介するのに10秒、質問するのに10秒。そのあとはまた怖がっていていい。加えて、会場に着く前に「誰が来るか」を調べ、自分の進路を変えうる1〜2人を決めて臨む。計画を持たずに交流会に入ったことはない、と述べています。

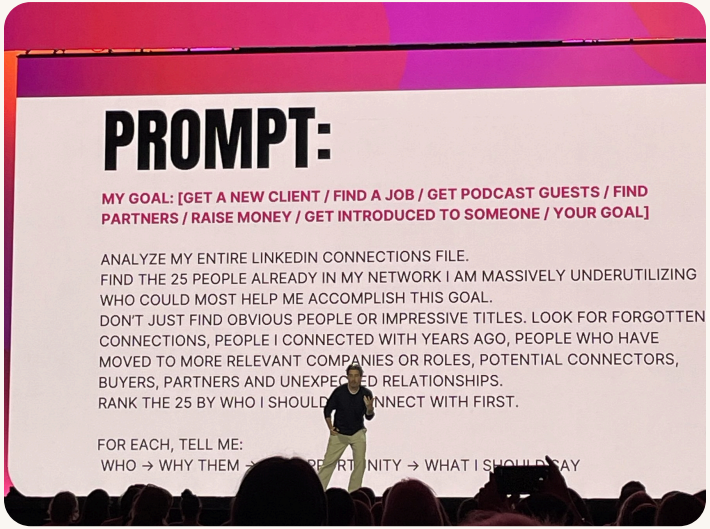
01

# そのまま真似できるAIの使い方

「5分でできるほど簡単」と紹介された使い方

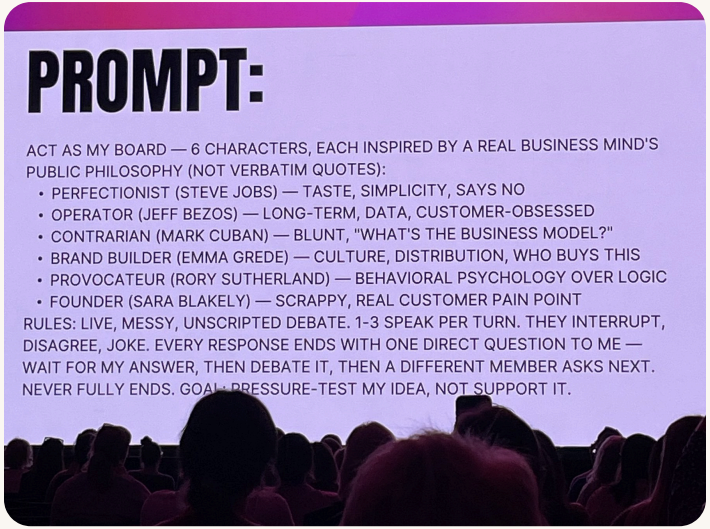
# ① LinkedInの人脈データを、目的から掘り直す

- LinkedInから自分の全データ（アーカイブ）をダウンロードする
- AIに渡して、**いま達成したいこと**を1つ指定する。新規顧客、転職、ポッドキャストのゲスト、提携先、資金調達、誰かへの紹介
- その目的に対して、自分が使い切れていない人脈を上位25人まで挙げさせる
- 誰に／なぜその人か／何を書いて連絡するか、までを出させる
- 「つながっていたことすら忘れている相手」が出てくる、というのが要点



# ② 自分専用の取締役会をAIに作る

- 実在する経営者の考え方を下敷きにした6人の人格を設定する。完璧主義者、実務家、逆張り、ブランド屋、挑発役、創業者
- ルールを決める。**台本なしで議論させる／1ターンに発言するのは1〜3人／割り込みと反論を許す**
- 全員の発言の最後に、必ず自分への質問をひとつ置かせる。会話を終わらせない
- 目的は**自分の案を支持させることではなく、叩かせること**
- 投資判断も、事業の方向も、私生活の悩みも同じ場にかける、という使い方



02

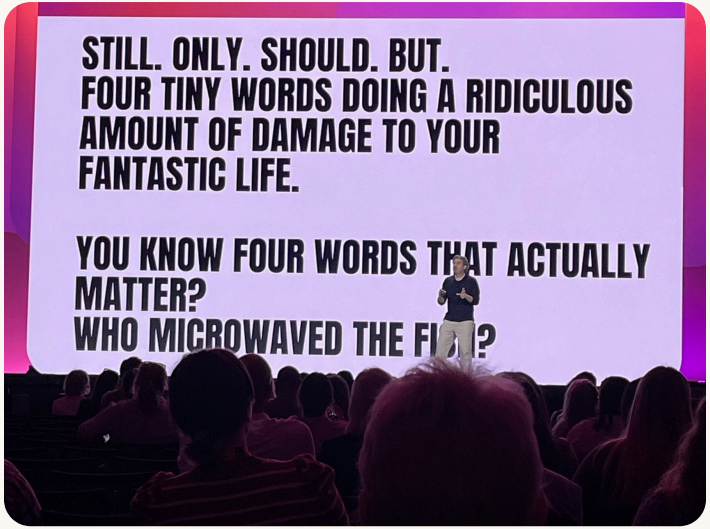
# 本人の話

# 壇上で語られたこと

- 執筆の依頼を受けたあと「自分が書いていいのか」という問いから抜けられなくなり、強い自己否定に陥った
- 続いた言葉は「自分は十分ではない」「資格がない」「成績が悪かった」だった
- 共有した理由は**「壇上にいる人は全部うまくいっていると思わないでほしい」**から。誰もが苦しんでいるという一点
- 他人の自信を、その人がうまくいっている証拠だと受け取らないこと

# 人生を削る4つの言葉

- **STILL（いまだに）**：「いまだに、自分より劣ると思う相手より稼げていない」
- **ONLY（たまたま）**：「たまたま誰かが辞めたから昇進しただけだ」
- **SHOULD（べき）**：「もっと幸せであるべきなのに」
- **BUT（でも）**：「誇っていいよ」「そうだね、でも」
- この4語が出たら、自分で止める。**いまの自分がそれである**、で終わりにする



# 書いた本について

最初に6か月かけて書いたものは捨てて、書き直した。売上はすべてがん研究への寄付に充てると決めている。「値段をつけて売ることに気が引けたので、寄付にした」という説明でした。発売から30日ほどで13万ドル規模が集まったと述べています。

# 締めのスライド

- 次の5年は、いちばん賢い人には報いない。**その勝負はAIがもう勝った**
- 報いられるのは、やる人
- 止めない人
- 準備ができていなくても、気にしない人
- 自分は十分だと知っていて、そのとおりに振る舞う人

